

改訂版

# マユトの旅



サキノ マコト

青山ライフ出版



改訂版

マユトの旅

目次

まえがき 6

赤い鳥 7

白いユリの島 13

かいぶつの住む岩 22

黒い岩の中 27

カモメ島に行く 47

カモメのリー 60

ケーとの戦い 74

フルーツ星のルエ 91

元の世界にもどる 96

あとがき 112

本書は、二〇〇三年に刊行した作品『マユトの旅』の内容を、一部加筆・訂正した  
ものです。

## まえがき

「初めて会ったとき、ぼくの背中に乗ってと、いったら、マユト君は、いやがらずに乗ってくれたよね。どうして、初めて会ったのに、すぐに信用したの」

マユトは、答えました。

「あのととき赤い鳥さんは、泣きそうな顔をしていた。何か大きな問題を、かかえていると思ったよ。うまくいえないけど、わるい子ではないと思ったよ」

(本書より)

## 赤い鳥

マウトは、草むらに、大の字に寝ながら、青い空を見していました。

そこへ赤い鳥がとんできて、マウトのそばにおりると、

「マウト君、ぼくの背中に乗って」

といました。

マウトが、赤い鳥の背中に乗ると、赤い鳥は、空高くとびたちました。

マウトが、下を見おろすと、畑や、家や、道が、小さく見えます。

マウトは、こわくなりました。

赤い鳥が、いました。

「マユト君、こわくないかい。

もし、こわいなら、しっかりと、ほくの背中の毛けにつかまっていれば、大丈夫だいじょうぶだよ」

マユトは、

「こわくないよ」

といって、グツと力をこめて、背中の毛をにぎったのです。

遠くとおの方に、青い海が、見えてきました。

赤い鳥が、いました。

「あの海うみを、わたるんだよ。こんどは、水面すいめん近く、とぶからね」

マユトが、聞きました。

「どうして、ひくくとぶの？」

「すぐに、わかるよ」



赤い鳥は、やさしく答えました。

海に來ました。少しずつ、スピードをおとして、水面近くを、とびつづけていると、前方の水面に、白いあわが、いくつもういています。近づいて行くと、あわの所から、黒い背中に白いおなかと黒いひとみのシャチが顔を出して、ひくい声で、「やあ、ひさしぶりだな。どこへ行くんだ」

赤い鳥に話しかけました。

「白いユリの島しまに行くんだよ。背中に乗っている、マユト君といっしょにね」

赤い鳥が答えると、シャチは、目を大きく開き、いいました。

「やめたほうがいいよ。あの島には、えたいのしれない、かいぶつが、住すんでいるというじゃないか。なんで、そんな所に行くんだ」

赤い鳥は、しんけんな顔かほで答えました。

「どんなことがあっても、行かなければならないわけがあるんだ。でも、今はいえない」

「わかったよ。おれも、役に立つ特殊な、装置を取りに、家にもどるけど、すぐに後を追うよ」

シヤチがいったのです。

赤い鳥は、うれしくなり、いいました。

「ありがとう。先に行くよ。マユト君、スピードを、あげるから、しっかりつかまっているんだよ」

急に、高くまいあがり、前よりも力強くはばたいています。

前方下に、白い遊覧船が、小さく見えたと思つたら、すぐに通りすぎてしまい、所どころに、白い雲がういていても、横切つて行くのでした。

日に光る、青い海をながめて行くと、やがて水平線の向こうに、山のようなものが見えてきました。

赤い鳥が、いいました。

「マユト君。あれが、白いユリの島にある山だよ。白いユリの島は小さな無人島な